

ふたたび故郷の地を踏む

藤原直美氏は、帰今後、愛媛県管内東予地方局今治庁舎の事務職に就いた。つぎの仕事が見つかるまでの繋ぎとして得た仕事だったが、波止浜出身の上司によくしてもらい、短期間であったが、ゆったりとリセットするには有意義な時間を過ごした。

ある日、その上司が天保山にあった本州四国連絡橋公団（以下、公団）の事務の仕事を紹介してくれた。公団は、1970年に本州と四国を結ぶ道路や鉄道の建設および管理を目的として創設された特殊法人であった。2005年に日本道路公団



公団時代にキャットウォークを同僚と歩いたときの写真（背景にあるのは大島）

等民営化関係法施行によって特殊法人としての役目を終え、現在は本州四国連絡高速道路（株）に業務が引き継がれている。

1983年4月、上司の推薦もあり藤原氏は公団に就職が決まった。職場ではおもに一般事務を担ったが、時代を反映して女性職員は「お茶汲み」の業務もあった。上司や同僚にも恵まれ、仕事は楽しかった。結局、6年間公団に世話になった。

公団時代に、藤原氏は同僚から編み物を薦められ、教室に通うようになった。高校3年生のときにクラスメイトが制作したダンス用ユニフォームの出来栄えに感動し、モノづくりの素晴らしさを知ったが、みずから何かを創作するのはこれが最初であった。編み物をとおして、自分の手を使ってモノをつくり出す面白さを教えてもら

った。



残糸を使い構図を工夫しながら
つくったセーター



3. タオル業界へ

実家の藤原タオルに入社

藤原氏は、1989年3月に公団を退社し、いったん家業の（有）藤原タオルに就職した。本格的に家業を手伝うのは、これが初めてであった。「時間もあつたし、できる範囲で手伝おうかな」とふとおもい、実家への奉公がスタートした。

ここで、藤原タオルの話に触れておく。信用交換所今治支局（今治タオル工業組合資料）によると、藤原氏の祖父・鉄一氏は、戦前、男工から技術者としてキャリアを積んだのち、1931年に藤原タオ

ル工場を波止浜にて創業した。戦時中は一時タオル製造を休止していたが、戦後復帰し、1954年12月時点では38インチの東紡式普通織機（ドビー16枚装置付き）6台を設置するタオル工場であった。そして、高度成長期の1962年10月に藤原氏の父親である道博氏が二代目を継承し代表者となり、1981年7月に有限会社藤原タオルに改組・改称した。同社は1983年7月に波止浜から越智郡波方町（現今治市）へ移転したが、その背景にはタオルの好況とともに住宅地での騒音問題があった。

道博氏は、高松経済専門学校を卒業後、今治タオル輸出（協）に勤務したのち、祖父の代からつづく藤原タオル工場に入社した。高松経済専門学校は、おもに企業者を養成するために1923年に創設された官立高松高等商業学校を前身にもち、第二次世界大戦中の1944年に高松経済専門学校に改称されたのち、戦後の1949年に



旧官立高松高等商業学校


（写真：香川大学経済研究所提供）

は同校を母体として香川大学が発足した。高松経済専門学校は実業学校として中四国地方を代表する名門校であり、道博氏はここで商業の専門知識を習得した。しかし、タオル製織については素人同然であったため、その技術は父親の鉄一氏から熱心に学び、職人としても頭角をあらわした。

腕のいい製織技術者となった道博氏は、新しいタオル生地を考案したり、ジャカード用のパンチカードもみずから製作したりしていた。たとえば、道博氏は1987年3月にパイル内に太糸を緯糸として織り込んだタオル生地を考案し、実用新案として出願している（出願番号「1987043569」、実用新案出願公開1988年10月）。

1957年、道博氏はタズ子氏と結婚し、その2年後に藤原氏が誕生した。タズ子氏は結婚当初、タオルづくりのいろはも知らなかったが、タオル工場主の嫁であることに覚悟を決め、懸命にタオルについて勉強した。そして、準備工程の整経から仕上工程の縫製まで、さらに配達など細々とした雑用を含め何でも器用にこなし、道博氏を支えた。藤原氏は、「母親は整経から縫製まで全部してましたね。縫製も丁寧ですごく早かったですね」と現役時代の母親を憶う。

藤原氏が実家のタオルメーカーに入社した1989年当時、藤原タオルでは12台の織機が工場に据えつけてあり、12、13名の従業員を雇い入れていた。今治タオル工業組合の「事業者台帳」を参照すると、その約5年後の1994年10月の時点で58～85インチの普通織機12台を設置し10名の従業員を抱え、年商は約1億3,000万円であった。主力製品は、無地のフェイスタオルやバスタオル、タオルシャツ、スポーツタオルなどであり、初期の頃はおもに楠橋紋織（株）の下請けをしていたが、後年は（株）日の丸タオルから注文を受けていた。その他、原糸調達では壺内タオル（株）、染色加工では大和染工などと取引があり、産地内の分業体制のもとでタオルを生産した。

信用交換所今治支局（今治タオル工業組合資料）によると、日の丸タオルは、1958年7月に合田清一  氏によって市内日吉町に設立され、バスタオルやフェイスタオル、スポーツタオルなどを主力製品とし、ピーク時には年商8億7,000万円を稼ぐ今治では中堅タオルメーカーであった。販売先（卸先）は時代によって多少変わるが、首都圏のタオルメーカーおよびタオル専門問屋が主であり、たとえば尾州の野村タオル（株）、泉州の川商（株）や（株）成願などに卸していた。だが、1990年代以降、中国を主とする海外からのタオル輸入の影響をまともに被り、2004年12月に赤字経営や貸し倒れの発生から4億2,000万円の負債を抱えて倒産した。

藤原氏が藤原タオルに入社したときはまだタオル生産量は伸びており、藤原氏は仕上工程のうち検品や箱詰め、また配送の手伝いを

して家業を助けた。縫製についてはベテランの従業員がいたため、このタイミングではほとんど従事していない。藤原タオルは、1990年代までは順調に売上を伸ばしていたが、主要取引先の日の丸タオルが倒産した煽りを受けて不当たりを出し、2006年12月に工場を売却し自主廃業した。「日の丸タオルさんに朝、配達に行ったんですよ。そしたら、いきなり張り紙がしてあって、不当たりで倒産したことがわかったんです。慌てて家に戻り、それからもうたいへんでした」と、藤原氏は当時の様子を振り返る。日の丸タオルは自社でもタオルを製造したが、域内には藤原タオルのような二次下請けのタオルメーカーがいくつもあり、日の丸タオルと取引のあった小さなタオルメーカーはかなりの影響を受けた。

藤原タオルの二代目であった道博氏は、自社の後始末をつけてから、2008年に78歳で人生の幕を閉じた。そして、藤原氏も家業の最後を見届けてから、2007年4月に今治市役所波方支所に事務職として勤務しはじめた。波方支所では、およそ5年もの間世話になり、しばらくタオルから距離を置くことになった。

フラと馬が合う

波方支所時代にフラを覚えた。隣の公民館でフラダンス教室が開かれており、ふらっと参加したのがきっかけである。フラはいまも藤原氏の趣味であり、週1回の練習は欠かさない。

先史時代からポリネシアの人びとは、フラの文化をもち、文字をもたなかったため、代わりに神様や自然への感謝を踊りで表現していた。フラには古典スタイルの「フラ・カヒコ Hula Kahiko」とモダンスタイルの「フラ・アウアナ Hula Auana」の2種類がある。フラ・カヒコは、瓢箪や小石、竹、樹皮など原始的な打楽器をつかって歌うチャンター（歌い手）のリズムにあわせて踊り、フラ・アウアナはウクレレやギターなどの楽器が奏でる、いわゆるハワイ音楽にあわせて踊る。

藤原氏の踊りは、モダンスタイルのフラ・アウアナである。藤原氏が通っているフラ教室が所属する中四国ハワイアン協会は、毎年1回の頻度で松山市にある愛媛県県民文化会館で「カ・マカニ・



2023年7月に愛媛県県民文化会館で
開催された「カ・マカニ・フラ・
フェスティバル」にて

フェスティバル」を開催している。
フラの音楽で藤原氏が好きな曲は、エルヴィス・プレスリーの「好きにならずにはいられない Can't Help Falling in Love」（作詞：Luigi Creatore、作曲：Hugo Peretti and George D. Weiss）や「ブルー・ハワイ Blue Hawaii」（作詞：Leo Robin、作曲：Ralph Rainger）、沖縄民謡のテイストが入った「花」（作詞曲：喜納昌吉）である。
藤原氏がフラと馬が合うのは、フラのもつ明るい雰囲気とハワイの文化や歴史を彷彿とさせる
趣きにある。日本の多くの人にとってフラはハワイ諸島と結びつく。藤原氏はまだハワイ諸島に行ったことはないが、週に一回はフラダンス教室でハワイの文化や歴史を全身で感じている。

（次号につづく）

